

## 読書の役割と読書の習慣化についての一考察

村上真理

### A study of function of reading and forming reading practice

Mari MURAKAMI\*

Keywords: Active Learning, reading practice

#### はじめに

文部科学省では「新しい学習指導要領の考え方—中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ—」で「アクティブ・ラーニング」といったキーワードを解説しているが、そこでの「アクティブ・ラーニング」は「活動を伴った学習」といったものではなく「主体的・対話的で深い学び」と捉えている[1]。そして「主体的・対話的で深い学びの実現」の項で、その「アクティブ・ラーニング」の視点に立った【対話的な学び】の「自己の考えを広げ深める」授業イメージのひとつに「本を通して本の作者などとの対話を図る」と指導に読書活動の導入を唱え、【深い学び】においては「感性を働かせて思いや考えを基に豊かに意味や価値を創造していく」活動を明記している。多くの学校で読書活動に関心がますます高まるのは、読書活動がまさにこの「主体的・対話的で深い学び」を満たすもののひとつであるからである。

その読書に関しては、毎年全国の小・中・高等学校の児童生徒の読書状況について実施される調査の、2017年の全国学校図書館協議会による報告をみると、高専生の該当する年代に関しては5月の1か月間の平均読書冊数は1.5冊であり、5月の1か月間に読んだ本が0冊の「不読者」の割合は、50.4%である[2]。今は情報機器の操作で簡単に必要な情報が入手できたり様々なゲームの登場があり、またその登場人物に熱中する若者も増え続けている。こういった環境が読書への関心や読書の時間を奪い、いっそう若者の読読書離れや活字離れを加速させているのではないかと危惧される。昨年度の報告書でも今の高校生は本を読まないのではなくて「読めない」のではないか、あるいはこのままではいずれそうなるのではないかと示唆されていた。

「主体的・対話的で深い学び」の主体的とは自分の考えを自分で決める、自分の行動を自分で決める事であり、情報があふれている現代社会に生きるために、確かにこの力の確立は重要である。情報をうのみにせず、批判的に見たり冷静に

価値を評価する力が求められているのだ。そして主体的に判断することとしっかりと読むことは、重なるの多い部分である。真に読むことは内容を吟味して自分の知識や認識とすり合わせる、すなわち自分と対話をしながら自分にとっての意味を考えることである。これこそまさに【対話的で深い学び】ではないだろうか。

本稿は読書が学生の「主体的・対話的で深い学び」となるように読書の意義を伝え、読書活動を推進するためのアプローチを見出すことを目的にした調査報告である。具体的には保護者に向けてアンケート調査を行い、保護者の読書に対する意識と、そこからうかがい知れる学生の読書環境を把握して、読書の習慣化の可能性を探るものとした。

#### 1. 読書に対する保護者の意識

今の時代、読書に対する保護者の意識や関心はどのようなか、読書活動には目的があると思われるのか、そうであればどういった目的を持った活動と捉えられているのだろうか。これを把握するために2年生の保護者65名を対象に読書に関するアンケートを7月に実施した。そこでははじめに保護者自身の読書に対する意識として、読書が好きであるかどうか質問している。結果は「読書が好き」が23名、「どちらかといえば好き」が28名、「あまり好きではない」が14名であった。「好き」と「どちらかといえば好き」を合わせると51名(78.1%)となる。

#### 2.1 子供の読書に対する保護者の意識

次に子供に読書が必要かという質問をしている。これに対する回答の結果は表に示すとおりである。ここから概ね保護者は読書に何らかの効果を期待していることがうかがえる。

ここで「やや思う」と回答した9名のうち5名は、前節にある質問には、自分自身は「読書があまり好きではない」に回答している。この点に関しても自分自身がこの年代の頃に読書活動がもたらすものをあまり意識してこなかったが、やは

\* Division of Liberal Arts

り読書は大事である、あるいは子供には本から何かを得てほしいと思っていると判断できる。

#### 子供の読書の必要性

選択肢	人数
思う	56名
やや思う	9名
あまり思わない	0名
思わない	0名

## 2.2 子供の読書に保護者が期待するもの

次に、それでは保護者は子供の読書に何を期待するのか、読書を勧めたい目的はどこにあるのかを把握するために、子供に読書が大切であると思う一般的な理由に挙がる7項目を提示して、そのうち第1の理由と第2の理由の2項目の選択を依頼した。そしてその結果を、回答者を「読書が好き」「どちらかといえば好き」「あまり好きではない」の3集団に分けて子供の読書に期待するものを集計した。結果は表で示すとおりである。記述による回答が4件あり、それらを各表の下に記述している。

#### 読書が好きな保護者が期待するもの

読書に期待すること	第1理由	第2理由	合計
書かれた内容を正しく理解する力をつける	21%	13%	34%
文を書く力(文字による表現力)をつける	13%	26%	39%
漢字や語彙、言葉の使い方などを覚える	21%	17%	39%
知識や知恵を獲得する	31%	26%	56%
自分の将来を思い描く機会を得る	13%	17%	31%
社会の動きや流行を知る	0%	0%	0%
一冊の本を読み切ろうと努力する	0%	0%	0%

#### 第1理由

- ・引用の仕方・適切な図表の使い方などリテラシーを身につける

#### 読書がどちらかといえば好きな保護者が期待するもの

読書に期待すること	第1理由	第2理由	合計
書かれた内容を正しく理解する力をつける	18%	10%	28%
文を書く力(文字による表現力)をつける	14%	18%	32%
漢字や語彙、言葉の使い方などを覚える	10%	18%	28%
知識や知恵を獲得する	43%	14%	57%
自分の将来を思い描く機会を得る	3%	14%	18%
社会の動きや流行を知る	3%	3%	7%
一冊の本を読み切ろうと努力する	0%	7%	7%

#### 第1理由

- ・人の立場に立って考える力や人の気持ちを推測する力を養う

#### 読書があまり好きではない保護者が期待するもの

読書に期待すること	第1理由	第2理由	合計
書かれた内容を正しく理解する力をつける	21%	28%	50%
文を書く力(文字による表現力)をつける	7%	14%	21%
漢字や語彙、言葉の使い方などを覚える	21%	7%	28%
知識や知恵を獲得する	36%	21%	57%
自分の将来を思い描く機会を得る	14%	0%	14%
社会の動きや流行を知る	0%	7%	7%
一冊の本を読み切ろうと努力する	0%	0%	0%

#### 第2理由(2件)

- ・人を思う気持ちや感情が育ってほしい
- ・豊かな感情を養う

この結果から、読書がもたらす効果として一般的な意見であろう「知識や知恵の獲得」を保護者は最も期待していることが分かる。またこの3集団を「読書が好き」「どちらかといえば好き」と「あまり好きではない」と2つに分けて回答を比較した場合、前者は読書を精神活動の機会であると、後者は読書を日本語力・読解力の育成の手段であると捉える傾向があると言える。これは保護者自身の読書経験からくる表れと捉えてよいだろう。

また当然のことながら「読書が好き」な集団には「完読」は努力行為ではなく、読書自体が目的であり今を楽しむ活動としていることが表れている。

このように読書に何らかの教育効果が期待されているのであるが、授業における読書指導は読書の面白さや大切さの気づきを促すことが主活動となり、実際の読書活動は授業時間外や週末に行われることになる。それではその授業時間外や週末を共に過ごす保護者は子供に読書を習慣化させていけるのか。とくに親と緊張関係になりやすい高校生の年代に家庭で強制して読ませるのは容易ではないだろう。次章ではこの家庭における読書推進の可能性について、アンケートでの回答を基に論じていく。

### 3.1 幼少期の読書習慣

はじめに「読書習慣はどのように身につくのか」ということを振り返る。これには家庭の読書環境が大きな要素であると今までも言われてきたが、家族の在り方やライフスタイルが変化している今その環境は存在するのだろうか。この点を確認するために、アンケートでは子供の幼少期における読書習慣の有無を聞いてみた。ここでも保護者の集団を「読書が好き」「どちらかといえば好き」と「読書があまり好きではない」と2つに分けて検証した。回答の結果を次の表に示す。

幼少期における読書習慣の有無

	保護者が「読書好き」、「どちらかといえば好き」	保護者が「読書があまり好きではない」
ある	20名	2名
ややある	17名	5名
あまりない	13名	5名
ない	1名	2名

「読書が好き」「どちらかといえば好き」な保護者のうち、子供が幼少期に読書習慣が「ある」と「ややある」のは37名、率にして72%であり、「読書があまり好きではない」保護者のもとでは7名(27%)である。家庭は生活習慣を獲得する場所であって、子供には親は身近な生き方のモデルなのである。この結果から家族の在り方が変化している今も、親が日常的に読書する姿を見たり、家庭で本に接する機会が多ければ子供は本を読むようになると言える。それでは、現代の保護者はどのようにまたどの程度本と関わっているのだろうか。

### 3.2 家庭の読書環境の現在

保護者の本との関わりを知るために、「読書が好き」と「どちらかといえば好き」とに回答した保護者の51名に「図書館を利用しますか」と「本をよく購入しますか」という、図書館の利用と図書購入の頻度について質問した。その結果を表に示す。

図書館の利用頻度

する	10名
時々する	18名
あまりしない	22名
しない	1名

本の購入

よくする	15名
どちらかといえば	19名
あまりしない	13名
しない	1名

このうち、図書館も利用するし、本をよく購入する人は7名である。本に触れる機会が得られるかどうかは居住地を取り巻く環境や通勤時間帯や通勤圏内の図書館や書店の有無も大きな要素となるであろうことから一律に論じることはできないが、家庭の読書環境は悪くなく、高校生の不読率の低さや本離れに家庭が大きな影響を及ぼしてはいないと言える。

### 3.3 読書の習慣化への展望

3.2の結果から、近年においては経済状況の変化などからライフスタイルを変えなくてはならないことなどがあり、家族での時間の過ごし方も変わってきてはいるが、子供が本に関心を抱ききっかけ、つまり身近なところで本の存在に気付くこと、大人が読書する姿を見するという機会は存在していることが分かる。また少ない時間でも家族が本について話す機会があることが想像される。これが家庭における強制的ではない形での読書の勧めではないだろうか。そして読書をする理由や大切さを自覚していき、自分の持つ興味・関心の分野の本に出会えば高校生の年代であっても自発的に読書習慣を身につけることは十分に可能だと考えられる。

## まとめにかえて

保護者の読書に対する意識と学生の読書環境を把握することで子供に読書を勧める力となる家庭の存在を確かめ、それによって10代半ばからでも読書習慣を身につけることは可能であるとの確信を得られたと感じている。

「読書は何の役に立つのか」「読書の中にどのような学びがあるのか」という問いは、読書と学習の関係を明らかにするために避けられない問いであるし、教員と教育環境によって意見もさまざまだろう。しかし、覚えておきたいことは「読書力」とは「たとえ嫌いな書物であってもその書物の内容や性格、要旨、主題などを正確に読み取り、それを他者に伝えられる力」[3]と定義されることである。冒頭でも触れた「主体的・対話的で深い」読書は、つまり内容をしっかりと理解し、知識として蓄え、疑問を絶えず持って、それらを自分自身に投げかけては蓄えた知識を基に答を探す学びの連鎖の作業を繰り返すことであると思う。

今は情報機器の発達によってインターネットでの情報収集やゲームが日常化して学生生活がタブレットやスマートフォンに支配されているように思われる。またゲームに関しては交流する主な相手も同じゲームを楽しむ人同士であるとコミュニケーションを取りあう範囲が狭くなり、これでは対話する力や伝える力と伝えようとする意欲が身についていかない。「主体的・対話的で深い学び」にコミュニケーション力の養成も重要な課題である。この力の養成の在り方を論ずることは別の機会に委ねるが、この状況をここで触れたのは読書の楽しみは情報機器での楽しみとは違ということを強調したいためである。

この点については本の楽しみ方の指南書といわれる書籍の冒頭に「読書の楽しみを知っている人にはわかります。本を読むことがどれだけ多くのものを与えてくれるかを。考える力、想像する力、感じる力、無尽蔵の知識や知恵……、読書はその人の知的好奇心、そして「生きていく力」を培ってくれます」[4]とある。読書の楽しみは自分の中で世界を広げて自分が好きになるような感情を育むことにあり、読書は主体的に今を生きる活動だということここを確信し、この点を強調して読書を勧めていきたいと思う。そのためにも保護者におかれてはアンケートへの回答がこの年代の読書状況に目を向け、読書や読書がもたらすものを再認識されるきっかけとなり推進者の一員となっていられればと望んでいる。

## 参考文献

- [1] 文部科学省, 平成29年度 小・中学校新教育課程説明会(中央説明会)における文部科学省説明資料  
3. どのように学ぶかー主体的・対話的で深い学び  
(アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善)
- [2] 全国学校図書館協議会: 第63回学校読書調査報告, 『学校図書館』805号, 2017
- [3] 天道佐津子編: 『読書と豊かな人間性の育成 改訂版』, pp. 85, 青弓社, 2011
- [4] 丹羽宇一郎: 『死ぬほど読書』, pp. 4, 幻冬舎, 2017